

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730417

研究課題名(和文) 産業遺産をめぐる歴史と記憶についての知識社会学的研究

研究課題名(英文) Sociological study in histories and memories of industrial heritage

研究代表者

周藤 真也 (SUTO, Shinya)

早稲田大学・社会科学総合学院・准教授

研究者番号：60323242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、旧産業の遺構や遺物が、地域づくりや観光開発の資源として活用されるとき、旧産業をめぐる歴史や記憶はどのように再構成されるのかを明らかにするものである。本研究では、西ヨーロッパや東アジアにおける類似の事例を参照しながら、わが国の旧鉱山を中心に、旧産業に関わる遺構や遺物の現状と関連した博物館の視察、現地での情報および資料の収集を通して、鉱山の歴史の語りにおける特定のパターンを発見するとともに、ローカルな主題と、他のローカルな主題、あるいはナショナルな主題とが拮抗し互いに争いつつ、旧産業の記憶が構成されている様子を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine how history and memory are reconstructed when the remains and relics of old industry are used as a resource for tourism of community development. In this study, with reference to the similar case of West Europe and East Asia, I saw the remains and relics of old industry, especially Japanese old mines, visited the museums of local history, collected information and materials, and analyzed that. The findings in this study are that we can often discover particular patterns in narratives of old industry and that we can often notice conflicts with local context and another local or national context concerning memories of it.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：産業遺産 まちづくり 鉱山 地域の記憶 旧産業 歴史の社会学

## 1. 研究開始当初の背景

(1) わが国の産業遺産に対する国家的な取り組みは欧米に比べて遅れ、1990年代以降、文化庁を中心に各地方公共団体の教育委員会等が「近代化遺産」として対象となる文化財を調査・選定するようになった。また、一方、経済産業省は、「地域活性化」を旗印として、2007～08年に「近代化産業遺産」を選定し、「先人達の物語」とともに提示している。

(2) 近年、産業遺産は、地域アイデンティティの再構成や観光開発の「切り札」としてますます注目されるようになってきている。特定の産業遺産をユネスコの「世界遺産」に登録する運動もみられ、2007年には「石見銀山遺跡とその文化的景観」が「世界遺産」に登録されたのは記憶に新しい。こうした運動が見られる地域においては、市民団体や住民による地域活動も注目される場所である。産業遺産は、地域住民の共通の記憶として地域づくりの核に据えられる一方で、そうした産業遺産を対象としたヘリテージ・ツアーが組まれるなど、観光化の取り組みも見られる。

(3) 産業遺産をめぐる学術的な取り組みは、1977年に発足した産業考古学会、土木学会や日本機械学会による選奨活動、観光学やツーリズム研究、地域社会学において見られる。しかしながら、そうした研究においては、産業遺産の評価や、観光化の経済的評価、地域活動やまちづくりの取り組みの分析に重点が置かれており、遺産化や産業遺産が地域の資源として活用される際の歴史や記憶の再構成という「歴史の社会学」の観点から分析を行ったものは少ない。

## 2. 研究の目的

(1) 産業遺産が、地域づくりや観光開発の資源として活用されるとき、それらをめぐる歴史や記憶はどのように再構成されるのか、またかつて再構成された歴史や記憶は現在においてどのような状況にあるのか。本研究は、このような関心のもと、社会学や文化人類学などにおける先行研究を参照しながら、いくつかのフィールドにおいて、今、実際に起こっていることからを具に観察し記述することを目的とする。

(2) 本研究では、産業遺産を、鉱工業に関するものに限定するのではなく、農林水産業や商業に関するものを含めた広い意味で取り扱い、産業遺産の背後にある歴史と記憶の問題を知識社会的に研究するために、産業遺産というものに対して根本からの検討を行う。こんにち、産業遺産と言う場合、多くは過去の産業で使用した遺構や遺物を指し示している。しかしながら、それらは、単に物体であるにすぎず、そこからその遺物が指し示す過去の社会のリアリティに迫るために

は、遺物を取り巻いている事的な空間、すなわち言説的なものが不可欠である。つまり、遺物が産業遺産となりうるのは、それについて書かれてきたこと、言われてきたことの積み重なるの総体によって構成されていると考えられるが、それはまた単なる遺物であるにすぎないものを、産業遺産として価値づける知の政治ともなる。特に今日の産業遺産をめぐる状況の中には、単に遺物や遺構にすぎないようなものを、価値あるものとして過剰に意味づけるような実践がしばしば見られる。本研究では、こうした知の政治の現場を具に観察し、その模様を記述していく。したがって、本研究では、遺産化に失敗したあるいは遺産化していない遺構や遺物についても研究の対象とし、過去をめぐる言説の構成に対して遺物はどのような位置にあるのか、それが過去の歴史と人々の記憶に対してどのような役割をもつものか、本研究は、これらのことを探究する。

(3) 方法論的には、M・フーコーの「考古学的方法」に対して、遺物とそれを取り巻く言説空間を記述する「考現学的手法」を確立することを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究における基本的な研究方法として観察法と、収集した資料に基づく言説分析を用いた。

本研究を実施するにあたって、まず研究対象となる旧産業の遺構・遺物と地域での取り組みの現状について知る必要がある。本研究では、さまざまな旧産業の遺構・遺物がある中で、特に鉱山を主要な題材とし、旧産業地域に訪問して遺構等を観察するとともに、その地域の歴史博物館（郷土資料館等）を訪問して旧産業の遺物の収集と展示方法について観察し、さらにそうした鉱山の遺構・遺物の保存や鉱山の歴史や記憶を扱った地域での取り組みについて情報と資料の精力的な収集を行った。

周知のように、かつて日本は世界有数の鉱山国であり、近代化を支えてきた基幹産業の一つであった。しかし、鉱床の規模と地下の採掘は、経済性・安全性の観点と資源の枯渇などから、諸外国に地下資源を求めることになり、炭鉱と金属鉱山についてはごく一部のものを除いてすでに全て廃止に至っている。それら旧鉱山のあった地域には、直接生産に関わるものだけでなく、生活や文化に関わる鉱山街を含めてさまざまな鉱山遺構が残されている。本研究では、そうした旧産業の遺構を視察するとともに、それらが地域社会においてどのようにまなざされているのかの観察を行った。地域によっては、歴史探訪の一方法としてそうした遺構を観察するコースを作るところもあれば、そうした遺構を利用した芸術祭などのプロジェクトを実施するところもある。また、旧産業の施設跡に観

光施設やレジャー施設を作るところもあれば、旧産業に関わる遺物を収集し展示する歴史博物館（郷土資料館等）を作るところもある。旧産業の衰退は、地域社会に多大な影響を及ぼしてきた。旧産業の遺構・遺物を観察することは、それらが現在に存在するコンテキストを解釈し理解することであり、地域の歴史を複合的に捉えるテキスト的な行為である。これは、遺物を収集し展示する歴史資料館においては、遺物だけでなく、年表や説明といった複合的な手法によって、まさにテキスト的にその地域の歴史を理解するという手法が取られる。本研究では、そうしたことから歴史博物館の展示を許可を得た上で写真撮影を行い、資料として扱おうようにする方法を取った。つまり、本研究では、観察を通して遺構や遺物をそれを指し示す言説空間の中で理解し、言語的な方法を用いて分析を行った。

そうした意味においては、補助的な手段として用いる現地での産業遺産の保存や地域の歴史を語り継ぐ活動などにたずさわっている方へのフォーマル/インフォーマルなインタビューもまた本研究ではこうした言説分析的手法の補助手段として用いている。なぜなら、インタビューは、それを文字に記録することによって、テキストとして分析しうるからである。

(2) 本研究では、比較研究を進めるため次の方法を用いた。

先述したように、さまざまな種類の旧産業の遺構・遺物がある中で、特に鉱山を主要な題材とした。

鉱山にはいくつかの種類があるが、主に金属鉱山と炭鉱を扱った。

研究対象とする鉱山は日本国内のものを中心とするが、国際的な比較研究のため西ヨーロッパや東アジア地域における事例を参照した。

日本国内において、旧鉱山地域の中からメインのフィールドとなる金属鉱山を選定し、フィールドワークを行った。

上記で選定した金属鉱山に関連し、近隣に存在する類似の事例、具体的には世界遺産登録活動を行っている文化遺産や、他種の鉱山（石灰石鉱山や石材鉱山）の事例を参照して比較するとともに、観光産業の現状について調査を行った。

上記に関わらず多様な種類の旧産業を意識して情報と資料の収集に努めた。

上記に関連して、旧産業の遺構の活用において、芸術家の取り組みが見られることが多いことに着目し、地域に入る芸術家の活動について研究することを通して、地域社会における歴史の経験に対する知見を深めた。

上記に関連する国際的な事例として、台湾における製糖産業の事例を中心に、日本統治時代の遺構と被支配経験の記憶

の現在を研究することを通して、国民国家におけるナショナルな記憶の語りの比較を行った。

産業遺産における遺構・遺物から、他種の遺構・遺物との比較のため、災害を記憶・記録する遺構・遺物について、東日本大震災における事例との比較を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 鉱山を中心とした我が国の旧産業地域の視察と情報収集、比較。

日本国内のほぼすべての炭鉱地域と主要な金属鉱山地域を訪問し、鉱山に関わる遺構や遺物の現状と、関連した博物館（郷土資料館等）の視察、情報および資料の収集、地域での取り組みの現状についての調査を行った。本研究の準備段階ですでに多くの炭鉱地域を訪問していたため、本研究期間では金属鉱山が中心となった。具体的には、鴻之舞鉱山、手稲鉱山、恵庭鉱山（以上、北海道）、太良鉱山、尾去沢鉱山、小坂鉱山、大葛鉱山、阿仁鉱山、荒川鉱山、吉乃鉱山、院内鉱山（以上、秋田県）、松尾鉱山、田老鉱山、野田玉川鉱山、玉山鉱山（以上、岩手県）、鹿折鉱山、大谷鉱山、細倉鉱山（以上、宮城県）、桑折鉱山、高玉鉱山（以上、福島県）、日立鉱山、高取鉱山（以上、茨城県）、足尾銅山、西沢鉱山、日光鉱山（以上、栃木県）、群馬鉱山（群馬県）、秩父鉱山（埼玉県）、佐渡鉱山（相川鉱山、鶴子銀山）（新潟県）、尾小屋鉱山、遊泉寺鉱山（以上、石川県）、神岡鉱山（岐阜県）、紀州鉱山（三重県）、新大谷鉱山、大江山鉱山（以上、京都府）、生野銀山、明延鉱山、多田鉱山（以上、兵庫県）、妙法鉱山、飯盛鉱山（以上、和歌山県）、石見銀山（島根県）、柵原鉱山、吉岡鉱山（以上、岡山県）、別子銅山、市之川鉱山（以上、愛媛県）、串木野鉱山、菱刈鉱山（鹿児島県）などを挙げるができる。

金属鉱山の歴史は、多くの場合、近代化以前からの歴史をもっているため、それへの言及が多く、相対的に近代化以降のことがらへの言及が省略されたり捨象されたりすることにおいて、基本的に近代化以降の歴史としてしか語られない炭鉱との際立った違いを見せていることが明らかになった。

(2) 西ヨーロッパ諸国や、東アジア地域（韓国・台湾）における鉱山遺構と関連する博物館の視察、関連する情報の収集活動。

イギリスにおいては南ウェールズ・ミッドランド・ヨークシャー・スコットランド地方の炭鉱、コンウォール・北ウェールズ地方の鉱山（銅、錫鉱）の遺構や関連する博物館等を視察し、イギリスの鉱山が産業革命との深い関わりのもとに語られている実態を観察するとともに、特定の語りのパターンがあること（例えば、炭鉱を中心とした鉱山における児童労働の語りなど）を明らかにした。

ドイツにおいては、ルールおよびザール地

方の炭鉱、東部の褐炭鉱、銅鉱山を視察した。特に旧東ドイツ地域においては、旧産業の遺構にエネルギー問題と統一後の変容の歴史が組み込まれていることを明らかにした。

そのほか、西ヨーロッパでは、ベルギー、オランダ、ルクセンブルク、フランスのそれぞれ国境地帯を中心に、炭鉱、鉄鉱山の遺構と関連する博物館、地域での取り組みの視察を行った。

また、東アジアにおいては、台湾と韓国における炭鉱、金属鉱山の遺構と関連する博物館、地域での取り組みの視察を行った。

(3) 栃木県日光市の旧足尾銅山地域におけるフィールドワーク。

栃木県日光市足尾町の旧足尾銅山における歴史や記憶を活用した「まちづくり」や地域活性化の取り組みについて、資料収集やフィールドワーク、関係者へのインタビューを中心に聞き取り調査を行った。具体的には、閉山(1973年)前後からの足尾における行政や住民、鉱山会社を巻き込んだ過疎対策や地域活性化、観光開発、企業誘致等の活動や、産業遺産化の流れを確認することを通して、近年の民間レベルでの緑化活動や足尾銅山の遺構の世界遺産登録運動などの位置と、それに至る足尾をめぐるまなざしの変化を明らかにした。

さらに、足尾という鉱山が学校教育の現場においてどのように扱われており、また扱っているのかという観点から、学校行事等で足尾を訪れる学校の実態を調査するとともに、かつての町の繁栄や公害の歴史と、産業遺産を教育において取り上げる可能性について検討を行った。

(4) 旧産業地域における芸術活動への着目。

本研究を進めて行く中で、旧産業の遺構が残る地域において、芸術家の活動が見られることが多いことに明らかになり、産業遺産との関係について検討を行った。芸術家の活動は、具体的には芸術祭の形を取って一般市民に対して提示されることになるが、そうした芸術祭においてしばしば作品の展示場として旧産業の遺構である建物等が活用される。そして、鑑賞者は、作品の鑑賞のために、必ずしも産業遺産化が進んでいるとは限らないそうした地域を訪問する体験を持つことになる。そうした事例を、国内数カ所の芸術祭を実際に訪問し、自身の体験から旧産業の遺構の産業遺産化と旧産業めぐる地域の歴史と記憶の構造を明らかにした。

(5) 台湾や韓国における日本統治時代の遺構や遺物について、特に、近年の台湾の製糖産業の観光化の取り組みについて。

台湾においては、2000年代に入って日本統治時代から長年基幹産業であった製糖産業が急速に衰退していく中、台湾製糖を中心として観光化の取り組みが見られ、その中で製

糖産業の記憶がどのように扱われているのかを確認した。そこでは、日本統治時代の遺構が台湾人のノスタルジーの対象として再構成されるが、復元の仕方などにおいて、台湾化されており、日本の観光ガイドブックなどで「懐かしさ」という言葉で紹介されるようなものとは別物として達成されていることを明らかにした。

(6) 遺構・遺物に関連して、別種の遺構・遺物としての東日本大震災における震災の記憶の保存についての研究。

東日本大震災において、特に津波の被害を受けた地域を中心に、震災遺構の保存状況と震災の記憶の保存に関わる活動の視察を行った。東日本大震災における「震災後」の人々の活動は、東北地域等に限定されるものではなく、日本という国民国家全体にわたる主題であることによって、ローカルなレベルの主題と、非ローカルあるいはナショナルなレベルでの主題とが拮抗し互いに争いつつ、「震災の記憶」が形作られようとしていることを明らかにした。

以上の研究成果は、研究期間中に次項の論文等に取りまとめて発表を行ったが、とりまとめ中のもも多く、今後順次発表していく予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

周藤 真也、鎮魂とは何か 東日本大震災の記憶をめぐる樹木の表象について、査読無、14巻3号、2014年、1-23

周藤 真也、3・11から足尾へ 旧足尾銅山における 知の政治の現在、早稲田社会科学総合研究、査読無、12巻3号、2012年、1-12

〔学会発表〕(計 2件)

周藤 真也、3・11から足尾へ 旧足尾銅山における 知の政治の現在、日本現象学・社会科学会第28回大会報告、高千穂大学、2011年12月3日

周藤 真也、3 日本の旧産炭地の現況 歴史と記憶の社会学の視点から、早稲田社会科学会第32回研究例会報告、早稲田大学、2010年5月29日

〔図書〕(計 2件)

周藤真也(編)、鉱山の歴史と記憶を考える 足尾の現在(暫定新版)、早稲田大学社会科学部周藤真也研究室、2013年、72ページ

周藤真也(編)、学校教育において足尾はどのように取り上げられるか(暫定版)、早稲田大学社会科学部周藤真也研究室、

2013 年、114 ページ

〔その他〕

ホームページ等

<http://suto.socs.waseda.ac.jp/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

周藤 真也 (SUTO, Shinya)

早稲田大学・社会科学総合学院・准教授

研究者番号：2 2 7 3 0 4 1 7

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし